学校運営協議会　会議実施報告書

１　会 議 名　　不破高等学校　学校運営協議会（第３回）

２　開催日時　　平成３１年２月７日（木）１５：００～１６：００

３　開催場所　　不破高等学校ガイダンス室

４　参 加 者　　委　員　　竹内　治彦　　岐阜経済大学教授
　　原川　拓雄　　垂井町立不破中学校長
　　長谷川妙子　　関ケ原教育委員会教育委員
　　北澤みさ子　　垂井町立宮代保育園長
　　中村　美幸　　地域住民代表（垂井町）
　　高木佐知子　　地域住民代表（大垣市）
　　高木　淳一　　不破高等学校ＰＴＡ会長

　　県教育委員会　　平野　孝之　　教育総務課長

　　学校側　　内木　晃　　校長
　　増田　泰志　　教頭
　　川瀬　英樹　　教務主任
　　曽根　章好　　生徒指導主事
　　臼井　澄人　　進路指導主事

５　会議の概要
※不破高等学校活性化協議会終了後、以下について協議
（１）生徒発表（本校での生活を振り返って）平成３０年度　不破高等学校外部評価の結果
（２）学校説明
（３）意見交換
・不破高校としてどんな個性を作っていくか。校長は２～３年で変わる。不破高の教員は比較的長く勤めている人も多いと聞くが、それでも教員は転勤する。転勤しても、不破高の課題はこうだというものを作り、示していくべきである。専門高校と違いアイデンティティを持たせにくい。学校として中長期的な展望を持ち、このような会議でチェックしていけるようにしていくことが必要である。学校として継続できる個性を持つべきである。
・発表した生徒は、中学校の時と違って、不破高校に来て自信をつけられたと言っていたが、他の３人も自信を持って堂々と発表してくれた。反対に、あまり堂々とはできない生徒はどうフォローしているか。保健室の来室者数が少なくなったことで学校がよくなったとなるわけではないとの話があったが、生徒の悩みをどう受け止めているか、どう自信をつけさせているか。中学校にも発信するとよい。
・５０年前に卒業した。いまだに伝統が残っている。かつての国語の先生、英語の先生の指

導により、自信をつけさせてもらえた。他校でも同じかもしれないが、生徒の話を聞いて、それが伝統だと思った。孫がいて、受験は不破高だけは嫌だと言っている。中学校に行って、不破高校の良さを話しているか。特に地元の学校に出向くべきである。

・校長先生のメッセージに感動した。学校のトップは熱い思いを持たなければならない。不破高校は個々に応じた早め早めの進路指導をしていることが評価できる。進学校などでは、生徒の適性や社会情勢など関係なしに大学入試の偏差値の話だけで、進路相談が終わっている。教員が生徒１人１人の特性を早期にとらえ、世の中の動きを知った上でのアドバイスをしている。卒業後も、困ったことがあったら不破高に聞きに行けるぐらいだといい。また、郡外の生徒が多く在籍している。それを考えると、ＪＲの大垣止まり（岐阜方面発）の電車はやめてほしい。アクセスの改善が望まれる。

・中学校でも特別支援教育を推進している。２年間の個別支援教育のモデル事業の指定を受けているが、今年で終わる。来年度は教員も減員となる。活性化協議会などで出た動きを継続できるとよいが、教育委員会次第である。また、卒業生が自分の力で、母校で話ができるようになったら良い。そういう姿が、生徒を通じて、中学校に伝わったらよい。

・大垣女短に進学した卒業生も一緒だった。これほど保育園と交流がある高校はない。発達保育の授業では、専門性の高いことも勉強している。生徒には、進路決定において学んだことを生かして、保育士も考えてもらいたい。

・生徒たちが快く、発表を引き受けてくれた。同窓会があったが不破高校の実情を知らない。教員が PR するより、高校生が中学生に伝えた方が心に響きやすい。中学校の教員の中でも不破高に対しての情報が不足している。生徒はスクールバスをよく利用している。

６　会議のまとめ

・今年度　立ち上げ　変則的に運営されていた点をお詫びしたい。中学校向けの進路説明会にて不破高入学生（１年生、３年生）の様子を中学校にフィードバックした。個々の生徒の様子と全体の数など、中学校長からはいい意味で生徒がやれることに驚かれた。学校運営協議会で出た提言を、学校としても歓迎し、教育委員会にあげたい。